

家庭内アンペイドワークがもたらす 妻と夫の幸福感

川内美月^a 白石小百合^b

要約

本論文では、近年減少傾向にある専業主婦世帯が一定数存在している要因の1つとして、家事や育児など家庭内アンペイドワークがもたらす「幸福感」を挙げる。夫と妻が行うアンペイドワークは、夫・妻自身の幸福感のみならず、互いの幸福感に与える可能性がある。そこで本論文では、「慶應義塾家計パネル調査」の既婚男女の個票データを用いて^c、妻と夫の幸福感を主婦タイプ別に分析した結果、妻の家事育児時間の長さは、専業主婦世帯で妻と夫の幸福感に、兼業主婦世帯で夫の幸福感にプラスに有意な影響を与えることが分かった。また、妻自身の幸福感に家事育児時間がプラスの効果があるのは専業主婦世帯であり、妻の就業をフルタイム・パート別で推計を行った場合には効果はみられなかった。つまり妻のアンペイドワークは夫と妻の双方の幸福感を高めることから、主婦タイプ選択に影響を与える可能性があると言える。

JEL 分類番号：D13, D90, I31

キーワード：アンペイドワーク、幸福度、専業主婦、兼業主婦

^a 横浜市立大学大学院国際マネジメント研究科 m215106d@yokohama-cu.ac.jp

^b 横浜市立大学大学院国際マネジメント研究科 shira@yokohama-cu.ac.jp

^c 本論文の分析に際しては、慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターによる「慶應義塾大学パネル調査(KHPS)」の個票データの提供を受けた。記して感謝申し上げたい。

1. イントロダクション

人々が行う日中活動¹は、金銭的報酬を得るペイドワークと無報酬のアンペイドワークに分けられる。近年はサービスの拡充により、報酬を支払うことで家事、育児、介護等の家庭内で行われるアンペイドワークを外部化できるようになったが、金銭的な余裕の有無に関わらず、アンペイドワークを外部化せずに自身で行う人々が多く存在する。本論文では専業主婦世帯が一定数存在している要因の1つとして、家事や育児など家庭内アンペイドワークがもたらす「幸福感」を挙げる。以下では、妻の就業状況(主婦タイプ)別に妻と夫の幸福感を高める要因分析を行い、1. アンペイドワークがもたらす妻と夫の幸福感と、2. 既婚女性による主婦タイプ²の決定要因に、アンペイドワークがもたらす幸福感の存在がある可能性について明らかにする。

2. データ・分析方法

本論文で使用したデータは、慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターが提供する「慶應義塾家計パネル調査（以下、KHPS）」である。KHPSは2004年から2019年まで同じサンプルに対し毎年調査が行われており、個人属性や普段の生活時間についてデータを収集している。本稿では執筆期間において最新年の2018年データを用い、夫婦のどちらかが60歳未満³の有配偶者、また回答者の配偶者も含むサンプルで推計を行う。基本的には有配偶女性(妻)が1,053、有配偶男性(夫)が1,094の観測数である⁵。推計は幸福感⁶を被説明変数とした順序プロビットモデルを用い、以下の推計式をもとに行う。

$$Y_i = \beta_1 H_i + \beta_2 I_i + \beta_3 U_i + \beta_4 X_i + \mu_i + \varepsilon_i, \quad 1)$$

i は観察された個人を示し、 Y_i は幸福感を示し、推計は妻と夫それぞれについて行う。決定要因は妻の主婦タイプ別ダミーの H_i 、収入を示す I_i 、家事育児時間を U_i として用いる。またコントロール変数として用いる個人属性 X_i は、妻・夫の教育年数、子供数ダミー、親と同居・近居ダミー、妻・夫の年齢、夫の就業ダミーを示す(大竹 2004, 白石・白石 2010)。また、この推計式は各変数の組み合わせにより(1)から(4)まで4通りの方法で使用する。具体的には、(1)では妻と夫の各家事育児時間、世帯収入を加え、(2)では妻と夫の各家事時間、各育児時間、世帯収入、(3)では妻・夫の各家事育児時間、妻と夫の各収入、(4)では妻と夫の各家

¹ 睡眠・食事・余暇等を除いた時の日中の活動をさす。

² 主婦タイプは、妻の就業状況別(先月の就業状況と調査時点での職位の設問から作成)に、専業主婦、兼業主婦(フルタイム・パートタイム)に分類した。

³ 定年以降には生活時間が変化するため(福田 2007)、本論文は、定年(「高年齢者等の雇用の安定等に関する法律 第8条」により定年が有効になる年齢は60歳以上)前の20代から50代を対象としている。

⁵ 記述統計や推計によっては観測数に変動がある。

⁶ これまでの一生の幸福感について、「全く幸福感がない 0」から「完全に幸福感を感じる 10」まで11段階での回答を求めている。

事時間, 各育児時間, 妻と夫の各収入を用いて推計を行う。また μ_i は観察できない個人効果, ε_i は誤差項である。

3. 分析結果

3.1. 主婦タイプ別 幸福感平均値比較

本節では推計の予備作業として, アンペイドワークと幸福感について主婦タイプ別に比較を行う。表1は, 主婦タイプ別にみた記述統計である。幸福感について妻は専業主婦, パート, フルタイム主婦世帯の順で高いが, 夫はパート, 専業主婦, フルタイム主婦世帯の順で高い。家事育児時間の1週間平均について妻は最も長い専業主婦(57.273時間)と短いフルタイム(23.83時間)では約34時間の差があり, パートタイムは約20時間短かった。夫はフルタイム, 専業主婦, パートタイム主婦世帯の順で長い, 全サンプルで比較すると, 夫と妻の差は約34時間であった。育児時間について夫は専業主婦世帯で最も高く, パートタイム主婦世帯で最も低い。世帯収入⁸についてはフルタイム主婦世帯が最も高く, 次いでパートタイム, 専業主婦世帯が最も低い結果となり, フルタイム主婦世帯との差は約111万円である。妻の収入においても同じ傾向であった。しかし, 夫の収入では専業主婦世帯が最も高く, 次いでパートタイム主婦, フルタイム主婦世帯の順となった。

表1 主婦タイプ別記述統計(平均値)⁹

	全サンプル	妻・専業主婦世帯	妻・フルタイム主婦世帯	妻・パートタイム主婦世帯
妻の幸福感	6.54 N:1152	6.61 N:266	6.47 N:489	6.53 N:335
夫の幸福感	6.43 N:1143	6.42 N:265	6.39 N:488	6.44 N:334
妻の家事育児時間	37.01 N:1158	57.27 N:267	23.83 N:492	37.07 N:335
夫の家事育児時間	3.26 N:1158	3.23 N:267	3.56 N:492	2.57 N:335
妻の家事時間	24.83 N:1158	35.03 N:267	17.88 N:492	26.94 N:335
夫の家事時間	2.26 N:1158	1.82 N:267	2.71 N:492	1.73 N:335
妻の育児時間	12.18 N:1158	22.25 N:267	5.95 N:492	10.13 N:335
夫の育児時間	1.76 N:1158	2.08 N:267	1.61 N:492	1.45 N:335
世帯収入	717.63 N:1157	664.43 N:267	775.96 N:491	690.00 N:335
妻の収入	143.49 N:1157	12.34 N:267	250.01 N:491	93.73 N:335
夫の収入	574.07 N:1158	652.09 N:267	525.89 N:492	596.27 N:335

⁸ 夫と妻各々の収入の合計額。収入は前年の金額である。

⁹ 表1と図1は「慶應義塾家計パネル調査」2018年データより筆者作成。Nはサンプル数を表す。

図1は妻と夫の家事時間,育児時間にかかる時間の長さを5つのカテゴリ¹⁰で分類し,妻と夫の幸福感的平均値を示している。これらを観察すると妻の家事時間が長いほど妻と夫の幸福感は高まることがわかるが,妻では時間数が多いカテゴリでは頭打ちの傾向が観察された。また,夫の家事時間が長い場合に妻の幸福感が高いことも観察できる。育児時間と幸福感では線形の傾向はみられなかった。

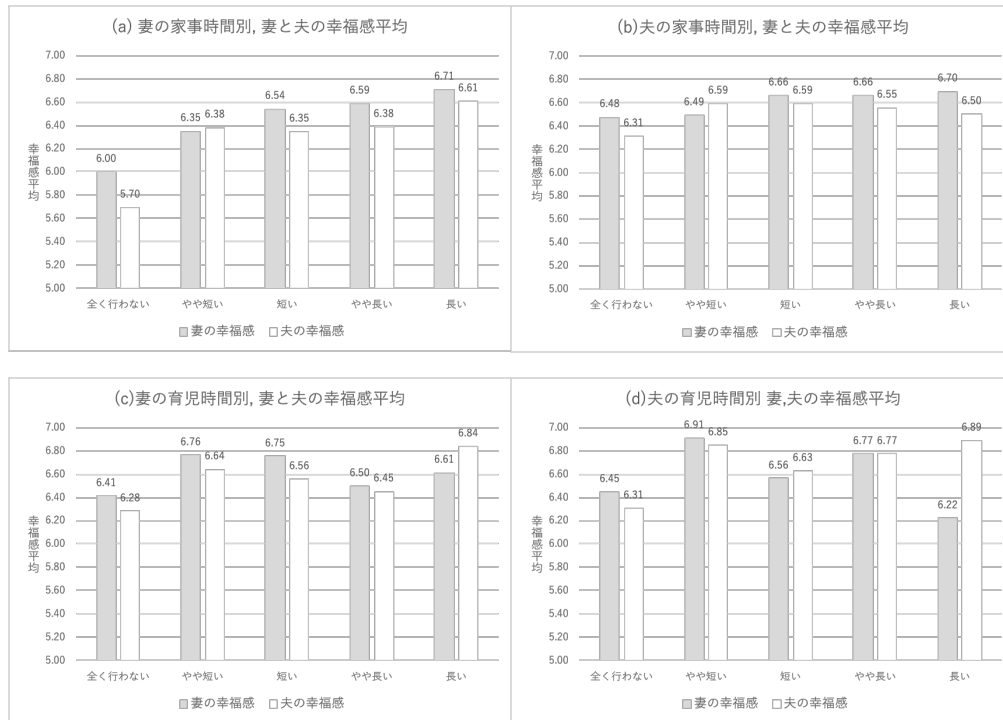


図1 妻と夫の家事育児時間別,各幸福感平均

3.2. 順序プロビットモデルによる推計

表2は専業主婦・兼業主婦,表3では兼業主婦をフルタイム・パート別で推計を行った。これらの推計結果¹¹より明らかになったことは次の2点である。まず,表2の専業主婦世帯では妻の家事育児時間,いわゆるアンペイドワークにかかる時間の長さは,妻自身の幸福感と夫の幸福感に対し,プラスに有意な影響を与えている(表2:妻(1)と(3),夫(1)と(3))。しかし表3のフルタイム・パート別の推計結果をみると,夫の幸福感のみプラスに有意だが,妻自身の幸福感には有意な結果が得られなかった(表3:夫(1)と(3))。つまり,妻によるアンペイドワークは,専業主婦世帯の場合に妻本人と夫の幸福感を高めるが,妻の就業状態

¹⁰ 「全く行わない」者は0時間,それ以外の中で検出限界値を超えたものを除外し,上位25%を「長い」,上位25%未満50%以上を「やや長い」,上位50%未満下位25%以上を「やや短い」,下位25%未満0%以上を「短い」として4つのカテゴリに分けている。

¹¹ 慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センター『慶應義塾家計パネル調査,2018』より筆者作成。
表内 ***, **, *は推定された各係数が1%,5%,10%水準で有意であることを示す。

をフルタイム・パート別に見た場合には夫の幸福感のみ高める。次に、いずれの世帯でも世帯収入、または夫の収入は妻と夫の幸福感にプラスの影響を与えており、先行研究と整合的な結果であった。妻の収入は妻自身の幸福感にプラスで有意な影響を与える場合があったが（表2：妻(4)、表3：妻(3)と(4)）、妻の収入は夫の幸福感に影響はなかった。

以上から、妻の家庭内アンペイドワークにかかる時間の長さは、専業主婦世帯では妻と夫の幸福感に、フルタイム・パート別に見た場合には夫の幸福感にプラスに有意な影響を与えることが分かった。つまり妻のアンペイドワークは、妻自身に加え、夫の幸福感も高めていることから、専業主婦の選択という意味決定に影響を与える可能性があり、本稿の特徴として明らかにできたことであると言える。

表2 推計結果：専業主婦世帯と兼業主婦世帯

	妻の幸福感-(1)	妻の幸福感-(2)	妻の幸福感-(3)	妻の幸福感-(4)	夫の幸福感-(1)	夫の幸福感-(2)	夫の幸福感-(3)	夫の幸福感-(4)
妻・専業主婦世帯ダミー	-0.0408	-0.0637	-0.0217	-0.0293	-0.1830	-0.2009	-0.2344	-0.2473
妻の家事育児時間	0.0047*		0.0047*		0.0053**		0.0050*	
夫の家事育児時間	0.0044		0.0038		-0.0023		-0.0008	
妻の家事時間		0.0075*		0.0079*		0.0071		0.0065
夫の家事時間		-0.0054		-0.0062		-0.0244		-0.0230
妻の育児時間		0.0030		0.0030		0.0030		0.0029
夫の育児時間		-0.0014		-0.0030		0.0138		0.0159
世帯収入	0.0006***	0.0006***			0.0007***	0.0007***		
妻の収入			0.0007	0.0008*			0.0005	0.0005
夫の収入			0.0005**	0.00051871**			0.0008***	0.0008***
妻・教育年数	0.1430***	0.1464***	0.1421***	0.1449***	0.0886*	0.0940*	0.0920*	0.0969**
夫・教育年数	0.0455	0.0467	0.0467	0.0490	0.0926**	0.0949**	0.0893**	0.0916**
子供数ダミー	-0.0185	-0.0204	-0.0176	-0.0188	0.0328	0.0240	0.0300	0.0216
親と同居・近居ダミー	-0.1315	-0.1372	-0.1341	-0.1425	-0.2868*	-0.2886*	-0.2800	-0.2820
妻・年齢	0.0154	0.0105	0.0157	0.0107	-0.0005	-0.0037	-0.0012	-0.0039
夫・年齢	-0.0238	-0.0235	-0.0240	-0.0239	-0.0071	-0.0049	-0.0068	-0.0044
夫・非正規雇用ダミー	-0.2801	-0.2599	-0.2904	-0.2772	-0.0549	-0.0617	-0.0271	-0.0385
夫・非雇用就業ダミー	0.0639	0.0756	0.0585	0.0661	0.1812	0.2056	0.1957	0.2180
夫・失業ダミー	-0.2273	-0.1667	-0.2328	-0.1760	0.6738	0.7392	0.6936	0.7578
夫・非就業ダミー	0.0152	0.0760	-0.0266	-0.0014	1.0954*	1.2525*	1.1717*	1.3263*

表3 推計結果：専業主婦世帯と兼業主婦世帯(フルタイム・パートタイム別)

	妻の幸福感-(1)	妻の幸福感-(2)	妻の幸福感-(3)	妻の幸福感-(4)	夫の幸福感-(1)	夫の幸福感-(2)	夫の幸福感-(3)	夫の幸福感-(4)
妻・フルタイムダミー	-0.0944	-0.0710	-0.1670	-0.1646	0.0801	0.0968	0.1284	0.1460
妻・パートタイムダミー	-0.0349	-0.0378	-0.0575	-0.0678	0.1829	0.1759	0.1978	0.1917
妻の家事・育児時間	0.0039		0.0039		0.0048*		0.0048*	
夫の家事・育児時間	0.0051		0.0040		-0.0013		-0.0006	
妻の家事時間		0.0065		0.0070		0.0062		0.0059
夫の家事時間		-0.0042		-0.0054		-0.0225		-0.0218
妻の育児時間		0.0025		0.0024		0.0029		0.0029
夫の育児時間		-0.0013		-0.0041		0.0142		0.0156
世帯収入	0.0006***	0.0006***			0.0008***	0.0008***		
妻の収入			0.0009*	0.0010*			0.0006	0.0006
夫の収入			0.0005**	0.0005*			0.0008***	0.0008***
妻・教育年数	0.1435***	0.1470***	0.1408***	0.1437***	0.0891*	0.0941**	0.0914*	0.0963**
夫・教育年数	0.0431	0.0439	0.0464	0.0484	0.0912**	0.0931**	0.0892**	0.0909**
子供数ダミー	-0.0111	-0.0119	-0.0087	-0.0086	0.0331	0.0256	0.0314	0.0237
親と同居・近居ダミー	-0.1277	-0.1343	-0.1319	-0.1409	-0.2870*	-0.2891*	-0.2841	-0.2860
妻・年齢	0.0141	0.0097	0.0145	0.0097	-0.0019	-0.0043	-0.0020	-0.0042
夫・年齢	-0.0243	-0.0241	-0.0245	-0.0246	-0.0074	-0.0053	-0.0073	-0.0051
夫・非正規雇用ダミー	-0.2690	-0.2522	-0.2927	-0.2800	-0.0418	-0.0525	-0.0270	-0.0392
夫・非雇用就業ダミー	0.0704	0.0813	0.0561	0.0632	0.1963	0.2174	0.2047	0.2254
夫・失業ダミー	-0.2323	-0.1660	-0.2604	-0.1999	0.6978	0.7618	0.7199	0.7836
夫・非就業ダミー	-0.0001	0.0541	-0.1045	-0.0812	1.0980*	1.2410*	1.1436*	1.2896*

4. まとめ

本論文は、主婦タイプ別に世帯を分け、妻と夫の幸福感の要因分析を行なった。分析の結果、妻の家事育児時間の長さは、専業主婦世帯で妻と夫の幸福感に、フルタイム・パート別に見た兼業主婦世帯で夫の幸福感にプラスに有意な影響を与えることが分かった。また、妻自身の幸福感に家事育児時間がプラスの効果があるのは専業主婦世帯であり、フルタイム・パート別に見た兼業主婦世帯ではその効果がみられなかった。つまり妻のアンペイドワークは夫の幸福感を、専業主婦世帯では妻の幸福感を高めることから、主婦タイプ選択に影響を与える可能性があると言える。しかし、本稿は 2018 年データのクロスセクションデータによる推計結果を示しているため、パネル調査を用いた長期的な観察が必要であろう。また被説明変数で用いた幸福感については、先行研究で用いられた幸福度に最も近い「これまでの一生の幸福感」という長期的な幸福感を用いたが、「慶應義塾家計パネル調査」では「最近 1 週間」や「最近 1 年間」など短期的な幸福感についても調査されており、アンペイドワークとの関係を考察する上で興味深い。これらを今後の課題とする。

引用文献

- 福田節也, 2007. ライフコースにおける家事・育児遂行時間の変化とその要因-家事・育児遂行時間の変動要因に関するパネル分析 (特集 生活時間). 家計経済研究所. 家計経済研究. 第 76 号, pp.26-36.
- 池田心豪, 金野美奈子, 中島ゆり, 2020. 無償労働と有償労働の間. 独立行政法人労働政策研究・研修機構. 日本労働協会雑誌. 第 719 号, pp.2-3.
- 今野浩一郎, 2020. 正規・非正規労働. 独立行政法人労働政策研究・研修機構. 日本労働研究雑誌. 第 717 号, pp.14-17.
- 大垣昌夫, 田中沙織, 2014. 行動経済学-伝統的経済学との結合による新しい経済学を目指して. 有斐閣, 東京.
- 大井方子, 松浦克己, 2003. 女性の就業形態選択に影響するものとししないもの-転職・退職理由と夫の年収・職業を中心として-. 会計検査院. 会計検査研究. 第 27 号, pp.213-226.
- 大竹文雄, 2004. 失業と幸福度. 日本労働協会雑誌. 第 528 号, pp. 59-68.
- 佐藤一磨, 2018. 専業主婦が本当に一番幸せなのか. 慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センター ディスカッションペーパー DP2017-010
- 白石小百合, 白石賢, 2010. 幸福の経済学の現状と課題. 日本の幸福度. 日本評論社. 東京.